

研究

孔子・顔回と広瀬淡窓・

中島子玉との共通性

宮下 良明

(会員 佐伯市古江区)

はじめに

生嚙り乍ら一筆、中国の歴史二千数百年前、春秋時代と云われる文化の発達した国家が永く続いた。その末期頃から中国戦国の時代へと歴史は移り変って行く。

一応日本の歴史書にも紹介され学んできた事は衆知の通り。その古代史上に活躍した武將と学者達の動静を揚げ少述して置かないと後述したい本編「孔子と顔回、淡窓と子玉」の類似点、または共通性の意味に納得の行かない結論に成ろうかと考えるので、春秋時代を通して日本でもお馴染みの「三國志」の時代まで数百年に及ぶ中国史の歩みを追想し乍ら次の項目より、淡窓、子玉の項

目まで論じてみたいと思う。

中国春秋時代

古代中国では「周」王朝時代が長らく続いた後、次に来る春秋時代以前を総合して「前漢」と呼称している。

西暦紀元前七二二年から前四八一年の約二四〇年間を春秋時代と通称呼んでいる。ただし歴史学者に依つてはその前後も含めて同時代に編入して著述する場合が多いと云われている。本書では時代の区分は歴史年表によって述べる。

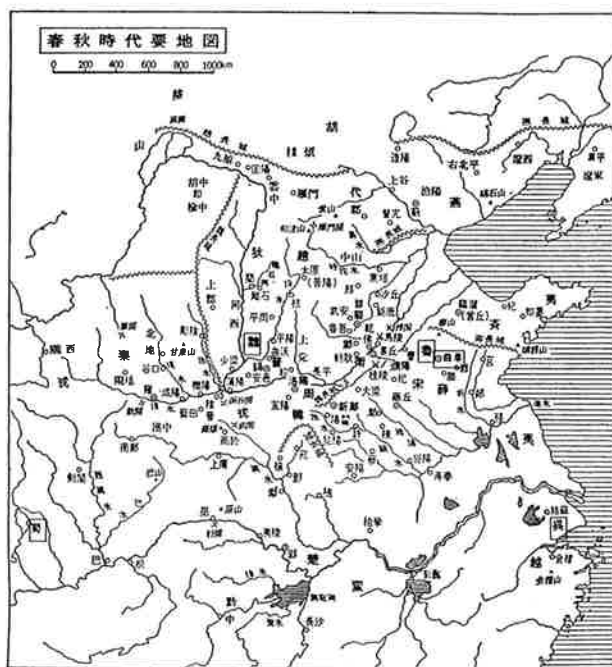
ともかく、やがて春秋時代の後半から強者間の国取争い、つまり下剋上等の闘争が益々拡大し、遂に中国戦国時代の動乱が到来する事になる。

春秋時代前半、周王朝の政治力が弱体化はするが、十二代「平帝」の時年号を元始と改めた。いわゆる現在の紀元二〇〇二年の初年は此処から始まる事になる。

さらに紀元九年「秦」国の始皇帝(万里の長城を築いた人物)が天下を統一自から始皇帝と称し、年号を初始と改めて君臨することになる。

しかし十六年後の紀元二五年漢の高祖に滅ぼされた。「光武帝」が天下を取るや「建武」と年号を改めた。歴史年表ではこれより前漢を廃止、後漢の時代が長く続くことになる。

さらにまた、紀元五八年、先帝を敗った「明」の皇帝



春秋時代要地図

(図中、長城の線や、韓魏趙の位置など戦国時代の状況をも多少含んでいる)

が天下を支配するや年号を「永平」と改め、天下に号令するが永くは続かない。

いずれにしても中国戦国の世は其の後も戦乱の尽き果てる事なく数代の皇帝が入れ替り、更に支配者の交替が繰り返されて行く。

戦乱が続く中、紀元二二〇年を境に年表では「三国志」の時代となり猶、国対国の争いが続き、学者、有名人の智慧比べの戦となつて行く。次に当時の中国地図を眺め乍ら三国の位置と武将達の名を外観してみよう。

魏の国は中国山西省南部から黄河北部を占めたが後に秦に滅ぼされた。後漢時代の末、紀元一九八年「曹操」が献帝を奉じて天下の実権を握るや、魏王となり都を洛陽に築いた。

日本最古の歴史史料と云われる「魏志倭人伝」なる史書は、紀元二〇〇年〜三〇〇年頃、晋の陳寿なる学者に依り編纂された「三国志」の中の一書で、魏国の歴史の中に見える史書を云う。我が国の関係文を魏志倭人伝

と呼称、現在日本の歴史では最古の史料となっている。

学者間でいまだに論争の的になっている「邪馬台国」所在地の女王「卑弥呼」と倭人伝の関連内容は、当時の倭の国（日本）の実情を良く物語っている史料と思う。

ちなみに中国春秋時代から、卑弥呼の時代年数を比較すると実に数百年後に邪馬台国の初見となり、中国歴史古代編は気の遠くなる奥の深さに驚く。

中国歴史年表、景初二年（三三八）の頃、邪馬台国女王卑弥呼は当時既に魏国と文化交流を始めていた史実を倭人伝が述べている。此の時代頃から漢字、漢文、言語等が我が国に伝来し日本語に発達したものと考えられる。呉の国（春秋時代の中国列国中の一国、当時の略図を参考すると揚子江下流域地方領有、三国志呉の一書に依れば「孫権」が江南に建てた国を指し、都は揚州に置く。四代で南唐に滅ばされた。

蜀の国（中国全土の地形では揚子江の源流地方での四川省の別称で都は重慶らしく、三国間の戦いで「劉備」が此の地に、蜀漢の国を建設。此の地に割拠した英雄や学者は多いと云われている。三国志の主役「諸葛孔明」もその中の一人、山東の出身で劉備に知遇された

劉備没後其の子劉禪をよく補佐したが、五丈原で、魏軍と対戦中没する。

次から後半の人物伝と題名の考察に移る。

老子と道教

老子が活躍した時代は前漢までさかのぼる。中国周王朝の全盛期の哲学者で、道教の祖と云われる。多くの著書に道德教があり教典としている。孔子の春秋時代より遥か百年の昔に実在した哲学者。老子を開祖に仰いだ道教とは、自然を旨とし老莊哲学、陰陽五行説、神仙思想、長寿の術を求め、符呪祈祷など行う。我が国伝来と共に、深く生活に溶け込み、陰陽道、修験道の源流とされ、江戸時代に信仰が盛んになった。庚申信仰は道教の流れを吸むと云われている。我が国の山岳信仰（山伏）もまた道教との関係が深い。

儒教と孔子（儒教は中国古来の学問であって、孔子を祖と仰ぐ教えで永く中国思想界の權威となり、後世の学者は総て孔子の教えに従っている。儒教では、四書、五教なる教典に従って物事を決めて行く。

我が国には五世紀（四〇〇）頃伝来したと云われている

る。爾後神道及び仏教と調和して日本文化に大きな影響を及ぼしたと各史書は述べている。

さて孔子が生まれたのは、中国春秋時代「魯の国」晶平郷山東省曲阜が故郷で、紀元前五〇〇年の昔に生存した。学者思想家で儒家の祖として今日に至る迄崇められた不滅の人物である。

江戸幕府が徳川五代將軍綱吉の命に依り、儒学を主とした最高学府を設立「晶平黌」と名付けた有名な背景には、孔子の生地^{ちな}に因んで命名した校名と云われている。

現在東京の晶平坂なる地名もまた、孔子縁に名付けたと云う。中島子玉の關係文は、淡窓、子玉の項で述べる事にして春秋時代の儒学者を少々述べてみる。

孟子^{もうし} 孟子^{もうし}山東省郷県^{そうけん}の生まれ。孔子とは同郷の学者。

孔子より約百年後の儒学者。孟子が活躍したのは中国戦国時代、戦争の最も激しかった頃の哲学者で、我が国に広く其の名は知られている。

孟子の字は「子車」^{あやな}学問を孔子の孫「子思」^{しし}の門人に受け孔子の教えを祖述して、仁義を説き「孟子七篇」を作り中国の儒学に貢献した。

孔子と顔回^{あざな} 嗚呼、天は子を滅ぼした。正に七〇歳の大聖孔子は、弟子顔回^{あざな}字子淵の死に会って声を挙げて泣いた後略、右の文言は筆者が戦前の教科書で教わった、師弟關係の道を説く歴史教科書中の一節である。

孔子の出自は既に述べた。顔回なる人物は春秋時代末期、「魯」の国の学者で孔子と同郷の門下生、十哲の首位、天命を楽しみ德行を以て聞こえた。

いずれにしても孔子は如何に顔回を期待していたか前文の一説で判ると思う。此の師弟の關係は親子にも勝る絆^{きずな}で結ばれていた事を物語っている。

類似点は題目の淡窓、子玉との師弟關係に共通するので除除に述べて見る事にした。

子^し 子^しさて古代中国では、子^しを通字に用いた学者には有名人が多い。中国から伝えられる子の意味とは一家の学説を立てた聖者と云う意に使う。特に孔子を指す（広辞苑）。当然漢学者は孔子にあやかっただ字、子を用いる事を本意とした。中国の影響による我が国も子を重用している。たとえば、天子、太子、君子^{くん}等で死語となつた「子爵」なる階級も子と云う字が使われている。

佐伯藩では、第六代城主毛利高慶の六男「赤装」^{あざな}字

は扶搖^{ふよう}公子^{こうし}で儒學者である。浅海井^{さかい}の曉嵐^{きやうらん}の淹^ひにその漢詩碑^{かんしひ}が造立^{ぞうたて}されている。以上、本論前の予備論を述べてみた。

広瀬淡窓と中島子玉

さて日田市と云えば、咸宜園の創始者広瀬淡窓と中島子玉の師弟關係を思い浮べる。

淡窓は天明二年（一七八二）広瀬家の長男として生まれたが、病弱な為、家督は弟に譲っている。歿^{ぼつ}年は安政三年（一八五六）十一月一日、中国春秋時代孔子に因^よんで自ら名付けた別宅、春秋園で大往生を遂げた。

淡窓は孔子の教えを守り儒學者として、漢詩人として卓越した指導者であった。其の門下生は三千人を越えたと云う。

幾多^{いくた}の偉傑^{いけつ}が輩出^{はいしゅつ}した咸宜園の中にあつて、門人中の筆頭に佐伯藩士中島子玉がいた。安芸^{あき}（広島県）の人、当時儒學者の筆頭「頼山陽」が咸宜園に淡窓を訪ねた際の言葉に我西遊（九州）して山水に耶馬溪を知り、人才に中島子玉を得たと絶讃したといわれる。勿論耶馬溪なる呼称も山陽の名付けである。

さらに中島子玉の漢詩文を一読した山陽はその優秀に驚いたと云う。これを機に山陽と接することになる。

彦山 中島子玉 詠

夢破山村夜未央 殘燈明滅隔鄰墻
法螺吹落中峰月 雲冷三千八百坊

子玉は淡窓の計らいで在籍六年咸宜園を退き、文政五年（一八二二）前述した幕府の開設した最高学府「昌平黌」に学び「美人十二詠」詩集を作った。忽ち子玉の名声は高くなつたと云われる。

其の後文政十一年（一八二八）昌平黌の学を終え故郷に帰り佐伯藩設立の「四教室」なる学問校の教授として儒学の高揚と子弟の育成に務めた。

子玉が佐伯に帰り、名勝を探訪し乍ら多くの詩を詠んだ期間はわずかに数年しかなく、其の間に詠んだ詩の中に彦嶽に登山し眺めた景観の素晴しさを讃えた詩がある。

次の写真は、彦嶽八合目の絶景の場所に造立している。第八代佐伯市長佐々木博生氏の揮毫^{きごう}に依るもの。誠

に堂々たるもので、道行く人々の憩いの場に成っている。拓本は筆者が採拓した。

子玉は天保五年（一八三四）三月十五日「破傷風」が原因で返らぬ人となった。三四年の若き人生であった。

次の詩が死を目前に詠んだ最後の漢詩となった。

高情自ら世人と違う、我は是れ南豊の一布衣。

三十六鱗猶二を欠く、今朝天上に龍と化して飛ぶ。

正に漢詩の達人と云う外はない。



彦嶽・中島子玉詩碑



子玉歿の報を受けた淡窓は如何に、落胆したが想像に余り有る。佐伯久成寺墓地に眠る子玉親子の、墓碑文は淡窓の撰文である。この墓碑の解説は「郷土佐伯の碑文」益田学者に詳述している。次の拓本は子玉墓碑文である。

日田咸宜園には、子玉の肖像画が保管され来る人々に師弟関係を詳細に説明されている。如何に非凡な器であつたかが分かるものと思う。

詠彦嶽

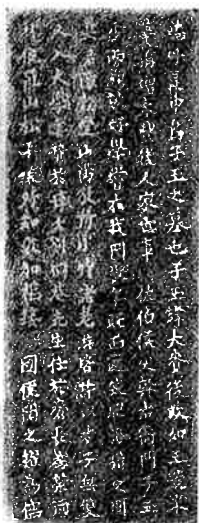
子玉 中島大貴

飛狐盤雲試豪遊
夾道松杉白日幽
谷崎墨陰山鬼語
林深樹杪橫殊愁
遠帆入雲中盡
逐嶼宛如天際浮
弟屋歸來心恍惚
夢魂猶掛瀑泉頭

第八代延享元年 佐伯水邊生父日



中島子玉墓戒名
(碑面)



中島子玉墓誌銘
(東面)



中島子玉墓誌銘
(南面)



中島子玉墓誌銘
(西面)

子玉の墓碑銘は砂岩系の石質の為風化が激しく、判読に困難な処が有る。しかし既に故益田先生が解読されているのでまずは安心して読む事ができる。

子玉と秋月橘門

秀峰彦嶽を讃えた文人、墨客は多い、其の筆頭は扶搖公子に始まり、唐橋世濟著「豊後国志」、中島子玉は勿論、秋月橘門、佐藤蔵太郎、中根貞彦、野々下一太、其の外短歌、俳句等を揚げると切がない。

其の中にあつて、子玉に劣らぬ儒学者秋月橘門もまた、彦嶽を読んでいる。橘門は日向国高鍋藩主の系統で儒学研究の為、中島子玉家に三年の食客として滞在したと云う。

養賢寺に其の来歴が造立されている。撰文は子玉の流れ中島損氏、別名固一郎である。

橘門は日田咸宜園に入門後、佐伯毛利公に仕え、四教堂の教授を務め其後明治政府の樹立と共に葛飾^{かつしかり}県の知事となつて佐伯を離れていった。次の漢詩は、橘門が彦嶽を詠んだもの

飛狐之嶺踰層巔 長嘯一聲人欲仙
大似狗哉雲走谷 高於我者目離天
穴成巨室十圍樹 瀑作疎簾万丈泉
南北東西難可弁 紫煙深處自飄然

御存知のように、弥生町に抜ける道筋に名門橋門の
子息、新太郎の撰文による金馬橋の碑が造立されてい
ます。

親子共々佐伯区域に尽くした業績は大きい。

おわりに

中国春秋時代と儒学者を取り上げた背景には、実に二
千数百年の昔、すでに儒教、道教の教えを論じていた。
その歴史の偉大さもさること乍ら、其の学問に対する師
弟関係が如何に厳しく深い信頼関係が保たれていたかと
同時に、子なる通字が学問者の一つの権位に関係があつ
た事も分った。

二千数百年前の孔子と顔回が今回の、淡窓、子玉の一
件に余りにも類似と共通性には、全くの偶然で無いと思

う。筆者の独断に史談の頁を汚すことになった。

【参考・引用史料】

「彦藏中島子玉碑」「広辞苑」「佐伯市史」
「郷土佐伯碑文」「日本史研究」「春秋左氏伝」
「古代中国史」

羽出道

竹野浦から羽出(旧中浦村役場の所在地)に通ずる峠道は
約一・八kmあり、どちらから登っても、険しい峠道である。
峠に登ってふり返ると、竹野浦地区が眼下に映り波静か
な米水津湾の向こうに、色利・宮野浦の集落がはるかに見
える。目を北に移せば、広大な佐伯湾のかたに上浦町の
四浦半島を望む。下りは、高さほぼ二mを超す猪垣を見る
ことができる。この道に、竹野浦側も羽出側もかなり上ま
で、石垣を築いていた。狭い段々畑があり、道を下ると羽
出地区である。

浦代浦から羽出に行く古道は、観音堂境内から山の尾根
に沿った道を登り、鶴見半島の尾根を竹野浦の上まで進み、
竹野浦―羽出道に合流する。『米水津村誌』・二万五十分
の一地形図「佐伯」・「鶴御崎」図幅を参照)